

平成 20 年度

(高知南国道路外埋蔵文化財発掘調査業務委託)

関 遺 跡

記者発表及び現地説明会資料



「関の大溝」

日時	記者発表	2008年8月22日(金) 11時～12時
	現地説明会	2008年8月24日(日) 10時～11時

高知県教育委員会

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター



SD1 土器出土状況 1



SD1 土器出土状況 2



SD1 土器出土状況 3



SD1 堆積状況

7 調査結果

(1) 検出遺構

溝 2 条：SD1（古代）、SD2（近世） 水田跡（古代）

(2) 出土遺物

古代：土師器（杯、皿、^{かめ}甕） 須恵器（杯、^{ふた}蓋、皿、高杯） 鉄製品 近世：陶磁器

8 調査成果

古代の溝 SD 1（「関の大溝」）の検出の意味

(1) 香長平野の土地開発史の究明に大きな一石

今回の調査成果は、SD1 と呼んでいる古代の大溝の検出にあります。調査区の西寄りで検出した南北方向に延びる溝で、幅 6m、深さ 1 m、U 字形に掘り込まれています。長さは 12m 程を確認することができましたが、更に南北方向に長く延びているものと思います。溝の底や埋土から出土した土器によって、奈良時代の後半（8 世紀後半）に掘削され、平安時代の前半（10 世紀ごろ）にかけて使われていた溝であることがわかりました。これまで県下で確認されている古代の溝の中では最も規模の大きなものであることから「関の大溝」と呼びたいと思います。

「関の大溝」は何の目的で掘られたのでしょうか。平成 18・19 年度に実施した西方の西野々遺跡からは古代の建物群が数多く見つっていますが、この大溝の周辺からは生活に関係する遺構や遺物は発見されていません。おそらく周辺には水田が広がっていたものと考えられます。この大溝



「関の大溝」実測図

は、下田川から水を引く灌漑用の水路として造られ、水田を潤していたものと考えられます。これまで香長平野の古代土地開発史は、主に条里制などから研究が進められて来ました。今回明らかとなった「関の大溝」は、文字通り大地に刻み込まれ土地開発の痕跡そのものとして、今後、香長平野の土地開発史を雄弁に語って行くものと思います。

(2) 地域における律令体制の浸透とその変質に迫る

香長平野の古代史は、土佐国衙や国分寺の調査のみならず、各地から掘立柱建物や倉庫群などの発見が相次ぎ、遺構・遺物を通してその変遷や諸画期が明らかにされつつあります。それらによると8世紀中頃には律令的な体裁が整い9世紀に継続展開する遺跡が一般的に認められ、規格性のある掘立柱建物や倉庫群、土器様式などに土佐古代史の景観を求めることができます。

しかしながら、10世紀になるとこれらの遺跡は断絶する例が多く見られるようになり、古代社会の変質と再編の進行が窺われるようになります。これらは官衙や生活空間の遺跡における現象でしたが、「関の大溝」においても同様な動きを見て取ることが出来ます。すなわち出土遺物から10世紀のある段階を最後に溝は埋まり、以後再び機能することはありません。これは水田経営に係る大きな変化として捉えることができるかも知れません。この時期、徴税に直結する生産現場においても大きな変化が起こっていたことを暗示するものとして興味深い現象です。

このように一条の溝の発見から、香長平野に展開したさまざまな古代史の情報を引き出すことが可能となります。